



雜
13
二

ヲ 1
431
2



門津1
 號 31
 卷 2

東京牛込區大
 餘丁町百拾
 坪内雄蔵

花紅景都咄卷中

一頃日或人の新又平安城此都ハ今年まで既ニ千の
 みるるにあん見ふらるる
 ふりく大掌會たが御執行ありしを切は暦數

此充るを後ひ祭らせむふらるるやと実小さるるおも
 かりあんと年代略記を考ふる相武天皇延暦十三
 年平安定都とあるせし所より今年天明八年ま
 でと算へんれば支干九百九十五年と数るはうさ海
 千のといふべし 曆代代所舊記ありしを委しくさる

出巻中

明治三十六年十一月五日
 坪内雄蔵氏寄贈

らバ十百のよ満るしと有りぬべー治世安民此
所惠より天下れ災と京地よはぐめあり難苦を
万民とさふうけあふとたよりべ飲食腹よりみち
寒さふ襦をかさぬる我軍りつとありとやい
見ん怨きありとやい見

一諸所焼失れ時刻をたすまうたよあつと実や火
感陽を焼一の三月餘もとだぬと古さ書あも記
したまバ此度の火とても徳取及び大社大寺
たど焼るふ三町とに町もかふるべけまバあな切ら

小町刻とさーかさけきと只その概と記とれま

- 一正月晦日の曉知れ上刻洛東團栗の辻より出火
- 石垣町川端に条下二町目より五条橋通まで五町
- あまより此間忽焼廣がる風ハ寅卯の方より吹く
- 一月中刻風辰己の方より吹と寺町永養寺へとび火
- 移る是洛中へ焼入ー始めあり
- 一月下刻菽の下通りと西へ焼佛光寺所門跡へ火
- 移りき辻より五条までの間焼廣がる
- 一辰の上刻因幡薬師菅大臣の社等焼る

一月中刻六角堂及びは色諸所焼廣がは

一月下刻堀川色より壬生の野まで焼ぬける

一月己上刻三条通まで焼廣がり下みくハ五条通れ

中程高倉烏丸の東西と南れ方風上へ焼ゆく火此

法東本願寺の方向を通と七条のさうみ根敷所焼れ際より下

寺町及び市野寺の方と東へかけ出ふ条寺町本屋町川原町所

一月中刻下刻の間中京より三条通れ東西諸所よ

焼廣がは

一月午れ上刻東本願寺の所前通門前焼る所跡

の火消役人大きふ防ぎ御くとどども都てこの色れ

町家井れ内へ諸道具と投入しゆへ水一滴もあ

らぬれり常ふ公は有べしさ色ども多人殺

せりて漸く寺内へ防ぎゆりあり下れ殊殺や

町焼のより根敷所焼火は危く是より火東へ焼

免ぐは

一月中刻五条色柳の馬場より東れ方所教堂れ

方へ逃げゆく

一月下刻三条通の西れ方所焼廣がりそれより

神泉苑かみいづみをかき色いろの所ところをかき火ひ後ご子こ

一 日未ひびの上うへ刻くわ寺町てらまちより日条ひぢょうより北きたへ焼やのがりり勢せい

願寺がんじれ境内けいん南みなみ乃の方かたれ寺中てらちゆう方かたまで焼やうせ寺町てらまち

此このよりより一ひと夜よは所ところより焼や止とまるる勢せい願がん寺じ本堂ほんどう

より北きたのうへ

一 日中ひちゆう刻くわ西にしれ方所かたところをかき方かた及および此この色いろ諸所しよところへ火移ひうつる

一 日下ひげ刻くわ所ところ旗はた町まち本ほん屋や所ところ川原かわら所ところを日条ひぢょうより北きたの方かたへ

焼やゆく西にしれ方かたよりより一ひと夜よは所ところをかき火移ひうつるる日ひ

らら通とよりよりや所ところの色いろへ焼やゆれ二条にじょうれ西野にしや中ちゆう不ふ在ざい

所ところのこ家け八九へん軒けんよりよりがのうへに焼やうせぬは時とき

五条ごじょう大橋たいしちゆう焼やるる

一 日申ひまの上うへ刻くわ雨あめあり出でるる南風なんぷうをかきけりくく諸所しよところれ火ひ

勢せいよりより一ひと夜よは所ところをかき本因寺ほんいんじへ北きたの方かたよりより火移ひうつるる

寺内てらうちと南みなみへ焼や廣ひろがり西本願寺にしほんがんじれ鼓樓ころうへ火ひうははるる

所ところ門かど焼や失しはは此この火風ひかぜ上うへ炎えんよりより段だん々たん東南とうなんへ焼や廣ひろがるる

一 日中ひちゆう刻くわ上京じやうきやう新町しんまちよりよりより千本通せんぽんどうと限かぎり西にし陳ちんと

北きたへ焼や廣ひろがるる但たゞし千本通せんぽんどうととままててはは物ものと

一 日下刻出水通西の行はめ七本松をよそ寺九ヶ寺をける
 北の方ハ紫野今宮所旅まで焼ぬけたりは時風よそ
 止む方ふちろく火勢おころく寺に鐘遊くつさ
 やそそおしハお音志のまりたり町のぶくちろく
 禁庭ハ所方まあく海しまさんとくハハハハ
 おろそ京都内七歩をりハ焼失ありとくや
 一 日暮方西の上刻西山の方よ墨を流せるがぶく黒
 雲起り乾の方より大風俄に吹起り西志れり
 降火勢大と小燧ん小東南北方へ吹立る程は所所

此方忽ち危しは時所公郷方おのく所立退遊さふ
 風雨殊小烈し
 一 日夜成の刻所築地の北は方道正菴のありり
 公家所を補へ火迎付く火消大名とくく此色り
 火移り二町斗焼る
 一 日亥の刻公家所を補備く小火うけるとど防ご
 刻寺中方限り小焼とまりしが焼出されの老ども夥し

く本堂の内又ハ縁れあさなまどく入々風雨を志のたぐる
 内は時刻はまきくねりひるびあく西の方より車輪れ
 おとれた飛火三ツ四ツ投うけるごとく来るごとく火が忽ち
 燃上り暫時小焼失ま是ふより怪我人等ぬしと
 あん

一日子の^上刻北^方鞍馬口の方へ焼ぬける

一日中刻東^に聚寺の^{ろく}防ぐと^どもは時刻おきて
 終り裏通り^の新町の方より^を所^基所へ火移り是より
 漸^に堂^に阿弥陀堂^の大門より^に諸堂へ火移り丑寅に

刻の間は悉く焼失と

一日下刻公家所^を焼ぬく焼失と

一日丑の上刻上京寺町れりより本^を町の方を南

へおれた^に所^靈の社^一条^華堂^を火移り

一日中刻所^色の^{ろく}焼^ふは^時あ^らむ

一日下刻上京より^に諸所^を焼ぬぐり本^を町^三条^下ル町

松平土佐守^を所^を焼ぬ^れ際^{より}焼^止ふ^是洛^中に^焼

とまりたり

一日曉寅の上刻洛東頂妙寺新地へ火^を焼^ぬり^はり^二条

新地しんちの方町かたまち家や所ところ焼や廣ひろがふ

日中刻下刻ひちゆうこくげこくふあり火洛中洛ひらくちゆうかく外がひよ充溢あふまし一月いちがつは火ひのて立昇たつしやうで流ながる方かたあり

一月二月朔日いちがつにがつしやくにち卯うの一天いつてん小諸所せよしく一面いっぺん焼萌やけもれて下火げかとあるそのとある刻こくより風かぜも少せうしハ静しずまりし

一月辰巳いちがつしんみの刻こくよよめて頂妙寺ちやうめうてう及び及び比叡ひえい新地しんち二条新地にじょうしんち地町ぢまち悉しつく焼やはくし東とう北ほく方かた寺院いんの際きわまで焼止やけどて

南なんの方かた壇王だんおう法輪寺ふりんじは町まちづり北きたの方町家かたまちやよよく焼やややする

一月午いちがつうまの刻洛中洛らくちゆうかく外がひとも大方おほく消火しょうかして徳とく火ひの入いりりり去ぞる所ところ所築地ついでをど追おひく焼やはくしあかしく又また出火でつかと

一月二日いちがつににちあはれはぐめく晴はる餘よをれ中ちゆう小日輪せうにりんはひをを見るみる見み女によれ軍ぐん光こうりおありと大おほききききししももくくり

たりそのそ日ひれ申まうの刻こくよりよりふりふりくくの事ことどもどもいいくく騒動さわどうととれれハ正ただしく盜賊とうさくののりりああせせるる虚言こゝろごころごんありしとくや

一月三日いちがつさんにち日ひののりりも火ひれ入いりりり去ぞるる去ぞる所ところ徳とく徳とくく焼や出でと

一 月五日六日小ありて浮船漸く流うせぬ
 一 さらき大社大伽藍及び惣として大家に驚く音
 山岳も震動し天柱も折け地軸も折るるか
 おりふらりすさすまぐさい見方あり御築地
 ちどの厚サ六尺有餘の土を流らぬ免難返り
 我本あど悉く焼はじく去中とどものり
 たるりのありいんや町家焼ゆをうん
 只瓦礫のころげきく沙まう番町京中小婦人
 女ありといろ指方も背ぶとるみそ又ハ猫鼠を介

虫類の生ものいさあり空と飛諸をふむす
 眼よさくぶらりのたりとうや南ハ七条通
 屋けゆと七条 北ハ紫野鞍馬口の聖印まで西ハ千本
 小例れ裏町と 但一ニ条よりわの方まぐハ中
 通 までハ焼ぬけむらむら色の裏町限り
 川のもあまぐで只廣くくして眼れかざる水は
 海く小怪異の火災小く
 一 焼失所救 凡三子百餘町
 記るよ

同家数 凡十八万三千三百余軒

同寺数 凡九百二十八ヶ寺餘

内 二百一ヶ寺ハ本寺
七百八ヶ寺ハ末寺

同塔数 凡七ツ
本寺寺 本寺寺 妙光寺
妙蓮寺 妙光寺 相心寺
誓願寺

同 市所様 公衆方 凡三百六十餘屋敷のよう

或人ハ屋敷を算へていさけ屋敷地を町

幡三間づふして六町を二里として凡修程

百五十五里餘なりといふ

同焼地数 凡五万八千三百餘

内 八千百餘焼地を
二万二千餘焼地

同惣我人職一と云ふ

大凡め形なりといふべし

一又焼地より寺社方分

公郷方 武家方ハ略之

○相心寺の本堂 浴堂 裏門

但一塔及九七ヶ寺の内
ありかこ七ヶ寺のこは

○上の御霊社

○西陈本隆寺

○同 淨福寺

○西本願寺 但し御門一ヶ所 幕下敷樓焼失と

○东六条招穀所

其外寺社境内の法守或ハ去後門をどかどか焼り

たるものり或ハ裏側焼く表側焼り又ハ表側

焼て裏側焼り或ハ焼りたどさぬぐありとどどを

一ツく記さふいとぬりし縁ハ今又も累と

一 火災し前幕下敷樓焼失と 炎一銀一匁又白糸

三合夕油一合代錢百文ぞうり百文又三ぞく

草鞋百文又二足又餅一ツ廿四銅焼飯一ツ三十

銭とやそれどくたればからかして火中を逃さ

ゆらうぞを飢死するものぬい水と香で逃る

事あれば息とく死するもの黠一又擲うり

押落され或ハ踏殺さる焼死するものあり死人の

さぬぐ筆紙は重一がし一は色は黒人その位と

りども鹿菜湯飯ふとだずいんや庶人ふみり

てハ三食と全くせざるものぬい縁る小御上

○正月廿月番の火清役丹波菟山に城を青山山下
野守敷也其外城別渡江及膳所并別菟山松別
高槻和及郡山等進々弛ゆるとありひ多々勲功あり
とくや

○焼後芝居ハ勿論それほの教師畫くいばく系
くの起らん暫一ハ京師と寂寥たつてがいままでやど
ちうく旧条東の芝居少く竹中儀志まが人ぶらう
芝居を始しよるは法不小芝居始り髪長く相之
表ハが怪はよあるまて本れよくに復せしあ
是や大平の好楽あるべし

○今夏六月祇園會所神樂洗ひハ例の如く御
行りしりごとを祓りそのハ出づりしあ
七日十日日神奉例年にかりることありしを
町中朝下れ灯燈ハ多く焼失し其上番附の困

○今夏六月祇園會所神樂洗ひハ例の如く御
行りしりごとを祓りそのハ出づりしあ
七日十日日神奉例年にかりることありしを
町中朝下れ灯燈ハ多く焼失し其上番附の困

竊たれは夫は略して執る所は燭ふニツツ
かけあり七日の祭終山坪のたどりおと山を
くりと引渡し坪のま所は會所ふ傍にわて
見物せしむ焼失せし山坪も焼失せし人形
たもと所との會所は傍にたどりおとしむに糸
糸は納涼あど例案よかたりてとれさびくぞ
足くーと我

燒失し山坪たのどー

函谷坪に糸馬丸あへ入お但し名物明徐徳喜れ

足送りそおわしハ焼失りたり

蠟燭山 西洞院に糸上元火災此後新不出来せしあり

ト出山 綿少後馬丸あへ入お焼失り

郭巨山 口糸西洞院車入り

船坪 新町口糸下几所ふ焼失り

菊水坪 室町口糸上几所

観音山 新町六角下町

○年頃九条ゆりみ住居はる糸屋何某とらわ
いある者あり生得志よかどる男ありしが

今度も大庄を幸れどく喜び穀類價を
 ひさばり白米纏ふ三合餘りとりつて鳥目
 百文ふくまり人を見とたがひくことごとく
 けしに其をどうを改めあつて一人の男が
 ました淋めて暮らしてを求めんとしあつり
 其高價をたがひた糸地の人れ難儀を顧
 見たまふとていさめけしとていさめごとく
 も同入むこの男涙をたがひてぬりしが
 又明日日來りて涙く是とていさめいさむ

主人いさく承引せぬ油目と暮らして益
 れ言葉と吐く外不安さ暮らせば求免
 うなきよと大い悪言ははるいさく詞を
 いんごんあつてけしはあつて外に暮ら
 したる價高くとも貴店れ外求むべき
 所あり安とありけしあつて年へたまひて
 相應れ價を取たまふと上天福を貴家
 小降し玉の舞をたがひてさへぐよかこら
 いさむ主人大いさく油目益之長言高

家と坊ぐぬむむと物見せんと音さうどと
 ほかんぞひまんとぬこのとれ彼の男を
 小怒と彼米屋を引はかんで二二間投付る
 其時始終を見居たる人と扱も氣味う
 手扱れぬとさん入のぬれ万人の見せ
 免さり悪き米やうまうとてさんぐと打
 たよりうふのぬれぬれとぞ育くと彼米
 屋はさんぐと投打き人をぬれぬれと
 が漸公付き後の先米とらひ物の價は

下一かバ人とさぬの難儀とのうはひ米や
 と投一人のさうとく益人ゆと人と
 ろろこびらふとぞ

○二月朔日頃の事かといふ人と住居を先
 泥ろと赤神あてといふまのひける折節
 草鞋とまのをれりつ一足のあつみ
 六十文ありといふ人と其高價ととむ
 海といふものがけ直段のまけととむ

る前巻中

三

一人は男は場ふ春かると扱く高き草鞋の
 りまりのうま乍去ふた能やりん某じ
 は百足討と跡は買とるべしと荷ひ
 取れりしとかひ扱ぐいふふ色とを
 故さる人々ゆにありらぬ商人打と扱
 けよりとひめく内は草鞋着ひし人
 荷もろつと控とあも迎とて行方と
 志はひかた男は草鞋と多くとりた
 人々小分あつて人を引とけりも

○燒地は内十分燒めとれりひし本抄
 街甲とらぬし又寺社方堂上方ふ
 火中と街の西へるをあり花山院殿
 廣幡殿及び其外七八ヶ所蹟あり
 古佐とる處浦をくものりやたり風れ
 吹廻しれと合あやゆふのいふかあり
 風強くと吹切ると成といふと信より
 是と知ると守又土佐守殿を安花山

日本書紀

七

院殿をぐる往古よりを梳きとみて火災と
 守りといふ今度れ火中人力の及ぶる
 所彼が通力ゆく防ぎ止めし火災奇
 妙れ事ありと感ぜらる人も有りて傍
 よのやいふ其梳きをなれ汝汰るのがじ
 狐福致勸請てし御を補方小焼え火を
 一方まくり有り又今度火災火逃まきし
 西を悉く梳きをなれ汝汰るのがじ
 通力ゆく火災をなれ汝汰るのがじ

あり時ハ八百方御神日夜小守獲り
 禁庭ハ何れも冬上りあひしハ八百方
 此御力さしつひあひ及みハさるるな程火消
 上りれ梳きをなれ汝汰るのがじ
 よれ事あり又花山殿土佐をなれ汝汰るの
 と守りといふ今度れ火中人力の及ぶる
 日本國れ眷屬悉くかり集め禁庭をな
 ど救ひ奉りといふ今度れ火中人力の及ぶる
 王地ありさるる取たりし火災かきつ火消

御神

と夢を扱んとすりあを削りたりと
 一是さそこにまふたが畜生れ儀す
 けいむと換抄とまかく庚申侍の夜も已
 小三更もよどだぬ

○方廣寺則大弘殿 此境内裏借を小年頃世を

細く住あ一人又雇られく日成送る男あ
 さいけを未ぬより起く飯をかした年白
 のど潤て夜れゆると依く雇ひあるる願
 此方ふる作するあく勤め働さける豊 補

此男あく者々あがな頼寺の浪士上回何
 某此方より目と出入りけるが正月晦日此曉
 例のどく彼方へ行んとあく起りあ
 まり風烈浦凄涼るをけしこばいほもよ
 里さく起く妻ふと出命れり此を
 見えり者たるに合傍を此男一人を
 も大風小眠さる免て同あ妻あよと出く
 ぬ人志さく物びりりて居けり
 清水れあさりともねがーさりし所の

おろしやしてとろとろと煮りしがたまに大津に
 ぬき火をくわひ煮出るとる内よ一文字
 と煮くは糸河東に方ふ落り怪しと
 見や内は火二抱斗柱のどくは
 まきく字留ふ登る半凡に五百丈その
 勢天をよほらぬかんとんくーグ上るも
 せんぐふまけてる内内ゆあぐは流
 うせぬは一人一毛立て怒りしと思ふ
 後よ是れまどとんえんど教をよれど

肉は入るそとゆるも夜れゆかしく夜
 具打りけだおもいん念佛して居る
 一が暫くあそて表れかこは高き火事
 あくしとゆるあ我この大風ふいうあふ
 者う火とあわまそてる枝と立出んま
 先さふ火の立昇りしとあそて枝り
 し世ふいふ火柱てその育とて枝りし
 がそるやんみたんとこれ男上回氏
 け館しく語りしとあや

攝取とられ光明くわうめうのまほしく十方じふぱう世界せかいをてじ
 て火災くわい諸難しよなんれ亡者むじやうのりもさうありま
 本國ほんこく土悉どしつ皆成佛けつぼつうごかうおもたうけ
 是こゝもかくて一七日いちにちれ法會ほふゑ滿座まんざして願ねがえ
 くはは功德くどくとりのく平等びやうどう一切いっけつ不施ふせ一回
 トく菩提ぼだい心しんと發はつして安樂あんらく國こくに往生じやうじやうせ
 めんと結願けつげんれ磬けいお鳴なくあへば聽き流りゅうの巻
 賤せん傳でん閱えんれ輩たぐひふあうちのて隨喜ずいきれ泪なみだ神かみと
 湯ゆとわうりごごかうりし濟き惠ゑあり或ある人ひとれ

侍小

長安ちやんあん失火しつかつ戊申ごしん年ねん万戸まんこ千門せんもん盡つ作し煙えん
 為な役やく道場だうぢやう做し薦せん福ふく靈魂りやうこん此日こゝろ應おほ歸かへ天てん
 是こゝやむり養和やうわれ頃ころ五幾ごき年ねん飢うへて死し人ひと
 途と小滿せうまんが仁にん和わ寺ていれ降くだ曉きやう法ほふ中ちゆう涼りやうく是
 を歎なげきたまふれ聖ひやうをかきしひて持もれ
 死し首くびれんゆはごうふ阿字あじをかきし縁えんを
 むじよふあむりごごあんでれけりふ系
 の中ちゆうゆへ一条いちじやうのり南なんへ九条くじやうまうて東ひがし京きやう極ごく

あると西来しよらい崔すいまがてにるにる三さんひひ二百にひゃく余あま有ある
 死し人にんと盡じんく葬やうままひひぬぬとむむううもも今いまも
 かかままぬぬ佛ぶつ門もん乃な廣くわう慈じ貴きむむ也や一いつ仰あつぐぐべべし

花約集都勅中 終

